

そしてあろうことか、口の中にまで亡霊の雄茎を挿入される。

「ふふふ……、調教されるのは尻孔だけだと思ったかい？ 私はね、舞台における役というのは、躰の内側からにじみ出るものだと考えている。だから君のことも、表面上だけ芝居の稽古をつけたりはしない。こうやって、身の内から感覚を覚えてもらう。徹底的にね」

「んんう…っ♡♡ん”ー”ーッ！♡」

頭を押さえこまれ、口内の雄茎までもがゆつくりと行き来をはじめめる。

そうされてはじめて、口の中までもが性感に疼いていたことを思い知らされた。

硬い雁首で口蓋をじゅくじゅくかすめられ、背筋が震えるほどの悦楽がこみあげる。

「んう…っ♡♡んんう……っ！♡」

そうしてふたたび快樂に染まりはじめた少年の体内を、後孔からの雄茎がより掻きまわすように往来する。

ぬちゅッぬちゅッ——♡

亡霊は体液を発さないから、この水音は少年だけのものだ。

淫楽と、たび重なる摩擦とにすっかり濡れ潤った音までも、目の前の男に聞かれている。